



第58回「おかねの作文」コンクール

特選　日本PTA全国協議会会長賞

最後のお小遣い

千葉県・千葉県立東葛飾中学校 3年 又多 嶺

今年の1月に祖母が亡くなりました。祖母は近くに住んでいたこともあり顔を合わせる機会が多く、たくさんの思い出があります。その中の一つが「お小遣い」です。祖母は毎月必ず私と弟にお小遣いをくれました。毎回、お金をお手紙と共にかわいいポチ袋に入れて渡してくれました。手紙には私の健康を気遣ってくれたり、勉強や習い事を応援するメッセージが書かれていて、読む度に元気づけられ日々の励みになりました。

祖母のお小遣いは、“お金”というより、“祖母の思い”を受け取っていたような感覚でした。そのため、祖母のあたたかい思いが詰まったお小遣いは、何となく使うのが勿体ない気がして、使わずに箱に入れて大切に保管していました。

小学校高学年になると習い事や友達と過ごす時間が増え、祖母に会う機会が減っていました。そのため、祖母からのお小遣いは父の手から渡されることが増えていました。父を介して渡されるお小遣いを手にしたとき、祖母の手から直接もらっていたときとは違い、祖母の思いをきちんと受け取っていないような気がして申し訳ない気持ちになりました。

中学生になると祖母と会う機会は更に減り、祖母との関わりが薄くなっていました。そんな中、祖母が腰を骨折し施設に入ることになりました。施設は私の通っている学校から近く、父から「学校帰りにでも、おばあちゃんに会いに行ってくれると嬉しい」と言わっていました。しかし私は会いに行こうという気持ちにはなかなかなれませんでした。祖母としばらく会っていないため、いざ会ってもどんな話をすればいいのかわからず、気まずい雰囲気になってしまふのが心配だったからです。

施設に行くことがないまま中学生になって初めてのお正月を迎えるました。お正月は祖母も私の家に来て一緒に過ごしました。私は久々に会った祖母とどんな話をすればいいのだろう、と考えこんでしまいました。そんな私とは反対に弟は積極的に祖母に話しかけ、会話を楽しんでいました。弟とおしゃべりし嬉し

そうにほほ笑む祖母を見て、うまく話せず気まずさが増してしまう自分が情けなくなりました。帰り際に祖母からお年玉とお手紙をもらいました。祖母は私のことを思って手紙を書いてくれたのに、私は何も伝えることができていないと思うと、祖母への申し訳なさがこみあげてきました。そして何もできない自分自身に対し悲しい気持ちにもなりました。

中学生になるとお金を使うことが増えましたが、引き続き祖母からもらったお小遣いは使わずに保管していました。自分は祖母に対して何も伝えられないものの、祖母が私にくれた思いは大切にしたいという気持ちがそうさせていたのかもしれません。

その後、祖母が病気で入院することになりました。私は祖母の容態が心配で、早く元気になってほしいと思っているのに、いざ病院にお見舞いに行くと、祖母にどんな言葉をかければいいのかわからず黙ってしまいました。しかし、そんな不甲斐ない態度の私に対しても、祖母は優しく接してくれました。病気で辛いはずなのに、私のことを気遣って話しかけてくれる祖母を前に、さすがにこのままではいけないと気持ちを奮い立たせ、なんでもいいから自分から話しかけるようにしました。お見舞いに行く毎に少しずつですが祖母と会話が続くようになり、やっと祖母の思いをきちんと受け取れたような気がしていました。

祖母は入院生活の末、今年の1月に亡くなりました。お葬式が終わると、父から「これがおばあちゃんからの最後のお小遣いだよ」とポチ袋を渡されました。中にはお小遣い12か月分のお金と「3年生になってもガンバロウ」と書かれた手紙が入っていました。病気で辛い状態でも、私のために、1年間分のお小遣いを準備してくれていたことや、動かし難くなった指でペンをもち、メッセージを書いてくれたことなど、受け取ったお小遣いから私に対する祖母の思いが伝わってきて胸がいっぱいになりました。

これまでに祖母にもらったお小遣いはどうしても使う気になれず、今もポチ袋に入れて大切に保管しています。このお小遣いには、祖母との楽しい思い出や祖母からもらったたくさんあたたかい思いが宿っているからだと思います。また、お小遣いが手元にあることで、今はいない祖母とつながれている気がするのです。祖母の思いを大切に、このお小遣いは、いつか祖母の思いにしっかりととこたえられるような形で使おうと思っています。